

# 身延山専門學校 第一回卒業論文

昭和十六年度

一、宗祖の法華行法觀	佐竹弘
一、本門戒體論	池上泰信
一、受持成佛論	清水文要
一、四種三段判ニ於ケル文底三段ニ就イテ	高野教誓
一、宗祖の密教觀	厚海學眞
一、上行自覺論	武内歎良
一、日蓮聖人の國體觀	杉山寶淳
一、唱題成佛論	淀川滋洲
一、台當兩家異相論	鈴木新二
一、本化攝折論	渡邊泰壽
一、宗祖の國神觀	増田能成
一、本門戒壇論	佐藤俊雄
一、本門戒壇論	村田海仙
一、本化攝折論	野口耀源

専門學校卒業論文

- 一、當家本尊人法論 香川英頂
- 一、當家に於ける因果觀 遠藤勝泰
- 一、三秘抄に依る本門戒壇建立に就いて 酒井圓通

## 餘白へ

編輯子 石川 是行

愚痴でもない、皮肉でもないが、祖山の學徒は、此の學報(會報)と言ひ度く無い)を己のものであることを忘れてゐる。編輯を幹事一人にまかせる、それも良からう。が然し、例へ少頁の雜誌を創るにしても、原稿がなくては、目的は達せられないそれも——他の爲では無い、自の爲ではないか、該當幹事は學報を作る、難さよりも、如何にして原稿を收獲するかに苦勞する。

今後は、かうした餘分な努力を拂はせない爲にも、在校の學徒は云はずもがな、離山後と雖も依頼の有無を問はずどしどし投稿して欲しい。昇格は確かに、專、中共に成功したのであるが、それに反して何たる不勉強、不努力、不反省なる現在の状態

態なのだらうか。此んな事を言ふと分齋を辨へない不屈者と言はれるかも知れないが、學報編輯の苦い經驗から公然と言ひ得ると思ふ。

正直な話、今號の最終締切日が何とシンガポール崩壊後であつた事を聞かされたら、棲神の發行が遅れた事と難じる人もあるまい。結核、棲神投稿の義務を負はされてゐながら、履行しないと言ふ事は、日頃の不勉強によると斷ぜざるを得ない、此れは、共に共に猛反省を要するのではなからうか。

ともかく二十七號は昇格第一號の事であるし、内容の充實を計つて、部報は芙蓉にゆずり、制限された範圍内で一頁でも多く學的なものを盛らうとした。それも希くば、祖山の乳を飲んで育つた諸師のものを——と、その結果は、餘り香ばしいものでなく、自分の理想通りに行かなかつた。が但し、今號の目次を眺めて以前と異つた感に打たれる人が多々あらう。即ち祖山の息吹を充分に盛つて居る事に氣付いて頂ければ、それで結構である。

端是信師、田邊正知師、山田英壽師、望月海順師、皆我々に最も親しい兄である。最近の卒業生だ。

茲で、も一度謂ふ「棲神」は我等のものであると。我々の實踐する一舉手一投足が字となり、文となつて顯はされる時、亦世間の眼を見はらせる事が出来るのである。

學報としての、その水準の高低は一に我々の勉強、不勉強に依るのであつて、「宗學は祖山で研鑽すべし」の通評を、許すま

で、我々は頑張らねばならない。  
我々は往年の碩學朝意傳三師、重乾遠三師の氣魄を受繼ぐべきではなからうか。

報國團文學部へ寄贈書籍

大學學報	立正大學研究室殿
叡山學報	比叡山專修院殿
摩訶衍	京都佛敎專門學校殿
信人	松楓居殿
求道	求道園殿
山柿	山柿會殿
其他新聞雜誌等	各位殿